



今まで沖縄の記録映画が何本かつくられたが、ある贖罪感がつきまといがちだった。薩摩藩の支配にひきつづく沖縄の皇民化、そして唯一の地上戦の中で、日



「ゆんたんざ沖縄」から

本軍による同胞虐殺、そして非戦闘員である島民の集団自殺へと導いた歴史をかえり見れば、本土から島へ取材に赴いたドキュメンタリー映画作家にとって当然の心情であらう。アメリカ軍による占領下において、日の丸の旗は祖国復帰の抵抗のシンボルとして映じたものである。復帰前につくられた東陽一の『沖縄列島』は日本本土を求心軸にもとめず、台湾、ヤポネ

シアへの飛び鳥つたいの視点を加えた点で異色であったが、大和んちゅうのほろ苦さと責任を背負っていたことに変わりはない。

西山正啓のつくった、復帰十五年目、天皇の沖縄(海邦)初訪問の年に発表された映画「ゆんたんざ沖縄」は、今日の沖縄人じしんの心の格闘に眼を注いでいる。「ゆんたんざ」読谷

ける文化の芽はえ、自在な身構えの村の反基地反戦の活気のありか、戦後四十年目にしてペールをめぐり集団自決の洞、チビチリガマへの光の回復、それを可能にした村のリーダーたちと金城美による「平和の像」つくりの劇的な進行にひたすらつれそってこの映画を完成した。

ず、語らず、風化にまかせた四十年の歳月があった。そして映画は「平和の像」をあたかも寺院の扉のよう洞窟の前に見えること村の歴史のメモリアルの公の地にかえていく。映画はその像づくりが遺族や村びとの心を変えざる原動力とし機能した、祭りにも似た消息をあますところなく伝えていく。

た村の村長、助役をはじめ、村の青年たちの泡盛のおいにするつき合いからうまれた村おこし、戦争体験の浮上と定着の行動様式が極めて解放的で、この映画の基調音になっている。

むらおさ(村長) 山内徳信氏も「ギブミーチョコ」世代である。その彼がはじめて社会科教科書で「民主主義・憲法」を読んだ感動

日本と沖縄の合作映画

『ゆんたんざ沖縄』の啓示

毎日新聞 87(S62) 9.21

村に焦点をすえ、そこだけ描いている。沖縄といえは嘉手納、ひめゆりの塔の南部戦跡や、観光開発で蝕まれゆく自然、そして石垣島の自保の「軍用」飛行場建設によるサンゴ礁破壊などパノラマ的に沖縄の今日を描くこともできたであろう。しかしスタッフは読谷村に住みつくように数カ月

らな世代である。平和の像をつくらうと提唱し、自決した村民の遺族の手づくりしごとへの参加を求めながら、閉ざされた記憶の闇から、集団自決の実相を聞き出そうと苦慮する村の中心の青年も、また、戦後しか知らない。村はずれの米軍上陸地点にあるチビチリガマの肉親の骨を戦後まもなく拾ったのち、誰も入ら

さまざまの主役的群像が登場するが、この映画づくりの発起をうながした彫刻家、金城美(大阪・教員)じしん、同じ沖縄人とはいえ、読谷村に魅せられたヨソモノである。一つ一つの村が邦であるような事情をこえて、読谷村に残波大獅子の巨大なモニュメントを築き、つづいて、集団自決の像をつくる。そう誘惑し

を丸木位里・俊夫妻当時、「沖縄の図」(制作中)に語るシーンはハッとさせるほどの啓示的である。このリーダーによって、村の教育行事にもちこまれる「日の丸、君が代」反対の高らかな村長施政方針演説の一語一句は、日本政府を刺すと同時に、沖縄ですら少数派となつた村の位置を物語る。つまり天皇の今秋の海邦国体



土本 典昭

評価を受け、「水俣の図」物語では毎日芸術賞受賞。他の作品に「原発切抜帖」「海盗のー下北半島・浜関根」などがある。

彼等、それに抗して、卒業式当日、旗を下に捨てた生徒たち。つまり沖縄のうちななる格闘のシーンが展開している。生徒たちの上気した顔が美しい。

四十一年後にして、はじめ

て自決の瞬間の自分の行動の細部を語り、その後、苦しみを酒にまぎらわした男、女、母、子どもたちの戦後史、それを基地に半ば占拠された読谷村が、個性あふれるリーダーを得て解きあかしていくさまは、沖縄の枠を越えて現代史の語り継ぎのあり方を感銘させる。映像もい。とくにラストの村娘を含む若者たちの残波太鼓の練習シーンは、大津幸四郎のカメラによってからだのみならず精神の運動美を描出した。

復帰十五年「日本化」する沖縄のゆれろごきを描いた、大和んちゅうとウチナンチュウ(読谷村)の合作映画をみる思いがする。

◇「ゆんたんざ沖縄」完成記念上映会は、25日から10月6日まで、東京・中野の「すぺーす・しょう中野」(03・3889・0536)で。また「残波大獅子太鼓と沖縄の夕べ」は10月7日夜6時から、東京・中野公会堂で。連絡先03・770・8800。